

互助と共助

小森 星児（復興塾塾長）<s-komori@maia.eonet.ne.jp>

自助、互助、共助、公助という区分は、以前から社会保障論の分野の基本的な語彙として用いられてきた。ところが、災害復興をめぐる政策論議の中で、互助と共助の使い分けが無視されたために、いまだに混乱が尾を引いているように思われる。

災害直後、被災者の救援は「自助7割、互助2割、公助1割」であったと言われている。この数字の妥当性は問わないとして、互助がいつの間にか共助にすり替えられ、行政の自主防災計画では「自助、共助、公助」の3助論に体系化されるに至ったのが謎である。おそらく「補完性の原理」の敷き写しが原因であろう。

もともと、3助論の系譜はかの上杉鷹山の「自助、互助、扶助」に遡る。パターンリスティックなその趣旨はともかく、江戸時代、この互助を実際に担ったのが五人組であった。五人組は単なる生活防衛のための相互扶助組織ではなく、「病気などで耕作できない者がいれば助け合って年貢を完納すること」、「悪事を企む者がいれば申告すること」、「駆け落ち人がでないように注意し、もしあれば連れ戻すこと」など相互監視と連帯責任を伴う厳しい規制を課す制度であった。

現代でも、農村部では冠婚葬祭や講、出役、さらに選挙や消防など共同生活のさまざまな局面で近隣社会の無償（非営利）の相互支援が機能している。近代的な企業でさえ、香典や饞別など伝統的な相互扶助の仕組みが残っているばかりか、競争社会の円滑剤として義理チョコなど新たな装いで復活する例もある。

このように互助とは家族愛、友情、隣人愛、愛校心、郷土愛など見返りを求めない無償の行為で

ありながら、所属組織への忠誠心をテストする一面があり、逸脱すれば組織から爪弾きされる危うさを含んでいる。

一方、共助は各種の保険制度の根幹にある考え方で、リスクと費用についての合理的な計算に基づいて運用されている。われわれの生活設計をいつ脅かすか測りがたい要素、たとえば失業、病気、介護、事故、災害などに備えるのがその役割である。ただし、保険のなかでもっともなじみ深い生命保険や年金は自助と共助の双方にまたがっている。

共助の制度が整備されるにつれ、これまで自助や互助が果たしてきた役割は相対的に縮小したといえる。このため、血縁や地縁に基づく家族制度や地域コミュニティの弱体化が始まり、互助的な終身雇用を前提としてきた企業も共助システムに移行している。

さて、自己選択と自己責任という新自由主義的旗印のもと万能のように見えた共助システムにも、実は大きな欠陥がある。まず、災害が突発した時に急場に間に合わないことである。先の自主防災計画で無視されたのも仕方がないといえよう。しかし、たとえば耐震補強などに保険制度を組み込むなどの幅広い発想が必要ではないか。

さらに、無保険者など共助システムから排除された層の問題がある。また、リーマンショックで露呈したように、情報の一方的な操作によって制度そのものが機能しない危険もある。

こうした状況を踏まえ、行政が「互助」の復活を重要な課題として掲げるのは当然かもしれない。しかし、それが瀕死の地域コミュニティの単なる活性化にとどまるのであれば、過大な期待を寄せるのは危険ではないか。

こうべ (あい) ウォーク 2009 報告

1999年に第1回こうべあいウォークを開催し、第3回まで大勢の方にご参加いただきました。




2001年に中断後も、集まった有志で毎年欠かさずウォークの灯を受け継いできましたが、10年目を迎える2009年、震災を契機に広がった市民活動を精神的にも資金的にも支援するという設立の理念を次の世代に受け渡す重要なイベントとして、こうべあいウォーク2009を開催しました。

年月日/2009年1月11日(日)

スタート/大国公園(9:30~10:30)

ゴール/みくら5(11:00~12:00)

主催/こうべ  (あい)ウォーク実行委員会

協力/近畿ろうきん地域共生推進室

参加者数/約250人(募金額約23万円)



スタートでいただいた募金は、NPO法人しみん基金・KOBEを通じて市民活動へ助成されます。

マップで紹介したポイント: 大国公園、鷹取東区画整理地区、カトリックたかとり教会、野田北部まちづくり協議会、日吉町ひだまり公園、日吉町ポケットパーク「あわせの地蔵」、新長田駅南再開発地区、「鎮魂と復興のベンチ」(神戸の壁)、大正筋商店街(「大正ハイカラ進歩住夢亭」)、震災ミュージアム、六間道商店街(「六間道なごみサロン」)「魏武帝廟」、丸五市場、本町筋商店街、神戸協同病院、大若地区震災復興記念碑、新長田駅北区画整理地区、せせらぎ、シューズプラザ、アジアギャラリー神戸、水笠通公園、新湊川、御菅東・西区画整理地区、古民家を移築した集会所、御蔵南公園、御蔵北公園、共同住宅「みくら5」、味彩館 SUGAHARA(旧菅原市場)



参加者の感想

なつかしい「あい・ウォーク」にプラカード持ちとして参加した。説明員でなくて良かった。辻信一さんの解説が秀逸で多くを学んだ。

「あい・ウォーク」は夢でありシンボルだった。多くの夢が消えてゆく。かすかな灯火を残して。でも姿を変えながらも諦めることなくみんなと追いかけてゆきたい。

島田誠(アート・サポート・センター神戸)

今回ご縁があり、アイ・ウォーク初参加を果たしました。ガイドの方の説明を受けながら、まちの歴史や、震災当時と今のまちに至った経緯を実際の現地を通して勉強する良い機会になりました。

本当に有意義な時間を過ごせました。そして、なんといってもゴールの豚汁がおいしかったです!ご馳走さまでした。八木尚子(会社員)

破滅的な経済状況と自治体財政の末期症状といわれながら、一年ぶりに歩いた長田の被災地は、再開発区域には高層ビルの建設が続き、見違えるように整備されて人影のない区画整理区域にも真新しい建物が増えている。巨額の無駄な投資を諷に刻んで、浄財をささやかな市民活動に捧げるウォークのひとつ。来年の震災15年をどのように迎えることができるのか、気になる10周年ウォークでした。松本誠(明石まちづくり研究所)

僕のような若い世代でも取っ付きやすく、興味深い内容で、非常に嬉しかったです。

解説の方はとても熱心に教えてくれて、非常に楽しく歩く事ができました。このIウォークを通じて、自分のまちを知ってるようで、実は全然知らなかった事を思い知りました。また参加します。ありがとうございました。

牧侑太(豊橋技術科学大学4年)

サンフランシスコに NPO の見学に行き AIDS-walk に参加して、5 万人が集い 5 億円を集めるチャリティー文化に度肝を抜かれた。我が i-walk は形式を真似ている様でいて中味は全く違う運動である。つまり街の復興度合いを毎年確かめながら、住民と顔を会わせて心を触れ合いながら、なおかつ新規 NPO への寄付金を募りながら進んでいく。この点で県の官製ウォークとも全く違う。今年は久しぶりに大きく実行してみて、i-walk の意味を思い出し、継続する覚悟を得た。

大津俊雄（神戸国際大学教授）

「新たな都市伝説」

先頭を切って歩きだしたグループは、風貌は長老、実際は若手の辻信一さん率いる被災地内公園緑地探検隊であった。軽妙な解説に参加した誰からも「何で公園ばかり歩くの？」という疑問も質問も出なかった。それぐらい楽しくためになった。

その一行に辻さんがこっそり教えてくれたのが写真の看板。「若松仮設」の所在を示す表示板が金網に結



わえつけられていた。仮設がなくなったのになぜこの表示板だけが残っているのだろうか。市の担当者も知っていてあえてはずさない何かがあるのだ。なんだろう？

この表示板のすぐ近くに全長 18 メートルの「実物大」の鉄人 28 号像がまもなく建立されるという。実物がないのに「実物大」というリアリズムと、もうとっくになくなった仮設住宅の所在を示す表示板のリアリティ。新たな都市伝説が息吹始めているのだ。

山口一史（ひょうご・まち・くらし研究所）

久しぶりにたくさんの方が参加してくれて感動しました。震災の記憶がまちから消えつつありますが、語り継ぐことを忘れないようにしたいものです。

三谷真（関西大学商学部准教授）

当日はゴール地点にて、まちコミの方々や地域の皆さんの豚汁作りをお手伝いさせていただきましたが、実は初めての炊き出し体験でした。

分量はもちろんのこと、具材の準備や火力調節などの作業について、お話を伺うと、いざという時にすぐできるものではないのだと、実感しました。具材の切り方とかご飯の炊き方とか、普段とは違ったテクニックが必要なんですね。勉強になりました。防災訓練や地域のおまつりで炊き出しをされたりしていますが、その意味を改めて認識しました。次の機会にはぜひウォークに同行させていただきたいと思います。

村尾佳美（しみん基金・KOBE）

11 日のあいウォークには仕事の関係で参加できず残念でした。が、今年も例年通り松本地区で早朝 5 時 46 分に慰霊祭を行いました。その際のエピソードを是非紹介したいと思います。

8 時ごろ後片付けをしていると、歩行に障害を持つ T さんが私のところにやってきて 2 枚の絵をプレゼントしてくれました。T さんがおっしゃるには「今日は記念日なので、あなたのために一生懸命絵を描きました」とのことでした。涙が出ました。この T さんは震災当時松本通 4 丁目に住んでおられましたが、私同様自宅が全焼し湊川中学校に避難したのですが障害を持つ子供さんがおられたため、臭いとかうるさいとかいわれてやむを得ず焼け野原になった自宅跡地に自力で簡易の家を作りライフラインも何もない時期にひっそりと暮らしていた方でした。その後区画整理によって通常の住宅を再建することになったものの、その後ご自身が脳梗塞をわずらい、この 14 年間を考えると大変なご苦労の連続であった方です。

私は松本地区まちづくり協議会の会長としてそれなりにがんばってきたつもりではありますが、小森先生のおっしゃる共助・互助といった観点での支援ができたのだろうかと反省しました。むしろ 14 年たった今 T さんに励まされている私に気づいてほしいです。

中島克元（松本地区まちづくり協議会）

復興塾・まち研メンバー紹介「群像3」

群像 「まちづくりを勉強したくて」

山室 良徳（中央復建コンサルタンツ株）

<yamamuro_y@cfk.co.jp>

私は、主にバスや乗合タクシーなどの地域公共交通に関する調査や計画、事業化等の業務に携わらせていただいています。また最近では、LRT（*Light Rail Transit* の略で、しばしば耳にされていることと思いますが、これがどのような都市交通システムのことを指しているのかという定義については国



マロちゃん、オス、14歳

や文献等によって異なっていて明確ではないのが実態で、例えば国土交通省道路局では「次世代路面電車システム」と示されています）に関する調査や計画業務についても携わらせていただいています。

こういった業務に携わらせていただく中では、しばしば地域住民等のニーズなどを把握するためにということで色々な調査を実施させていただいたり、あるいは計画の内容等について地域のみなさんと一緒に考えるためのワークショップを開催したり、地域住民説明会等を開催させていただいたりしています。

このようなことに携わらせていただく中で、色々と考えさせられることが多々ありましたところ、森栗先生に出会い、色々とお話をさせていただいたり、アドバイス等をいただいたりしてましたら、あれよあれよといつのまにか、こちらの復興塾・まち研の方に厚かましく参加させていただくこととなりました。

こちらで学ばせていただいたことや経験させていただいたことなどを踏まえ、まちづくりや地域、人、コミュニケーション等について考え、今後の取り組みにいかしていきたいです。

話はかわりますが、私は体を動かすことが好きで、可能なときはですが、週末にサッカーや野球、テニス等をしています。一方で、特に会社に入

ってからは体力の低下をつくづく感じていたこともあり、平日も帰宅後、夜な夜な筋トレやジョギングをしております。

こういったつらい？しんどいことは三日坊主になりがちなのですが、珍しくもう5年くらいも続いています。習慣・義務のようになっているからとも思いますが、体力を維持するため、楽しくいつまでもスポーツができるため、日々健康で過ごしていくことができるためなど、きっとものすごく危機感を感じているからだろうと思っています。

この”危機感”を持つことや、”できることから”、”無理することなく”、”一歩ずつ進んでいく”ことが重要なポイントになってくるものと思います。

群像 「ペーパードーム」

垂水 英司（台湾まちづくり研究会代表）

<tarumie@hera.eonet.ne.jp>

昨年の9月、3年前神戸港で見送った「ペーパードームたかとり（PDと略します）が台湾で再生しました。PDを育ててきたたかとりコミュニティセンターや野田北部地区、そして新たにPDを育てることになる台湾の被災地埔里鎮桃米村。私は二つの舞台の



立柱式で（左）

いわば繋ぎ役として3年半、いろいろ紆余曲折がありました。随分楽しませてもらったというのが正直な感想です。完成式には神戸から30人ほど参加、大いに盛り上がりました。

ついこの前、PD移設の台湾側推進役である新故郷文教基金会から来たメールに「春節の7日間で1万人以上の方がPDにこられました」とありました。「えっ、あの田舎にほんと！」うれしい気持ちは確かにありますが、少し心配にもなりますね。新PDはどこへ向かっていくのでしょうか。人気者になるのはいいが、まちづくりの基本、足元の桃米村から浮き上がらないようにと願っています。台湾の人たちはおそらくこう言うでしょう。「まあ、何とか上手くいくでしょう」基本的に楽

観的なんですね。



皆さんも台湾へ行かれるときは是非 PD を訪れてください。

群像 「自分のことエトセトラ」

辻 信一 (株)環境緑地設計研究所)

<nob_tj@yahoo.co.jp>

自分のことを紹介せよとの副理事長からのお達しが来ました。さて、何から始めましょうか。まずは、生い立ちですね。

1949年に神戸で生まれました。丑年でして、今年の2009年はちょうど還暦にあたります。エエ歳になったものです。

生まれた神戸市兵庫区に育ち、小中高と近くの公立学校から京都の某私大で地理学とやらを学んだことになっています。学生時代からアルバイトに行っていた株式会社都市・計画・設計研究所(UR)に就職しました。あの故水谷穎介先生が率いていた事務所です。そこには、現まち研理事長の小林郁雄さんもおられました。

URでは、市街地再開発の計画や実務、都市計画の調査などを主にやっていました。この仕事は、再開発区域内の住民、地権者の方々と相談しながら計画をつくったり、事業化した場合は実際の事務をしたりします。たぶんこの仕事で、住民とのコミュニケーションのやり方を体得したのでしょう。

URに14年ばかりいたあと、株式会社環境緑地設計研究所(ELD)に移籍しました。この事務所は、元URにいた人たちが中心に営まれていた造園系の事務所ですが、当時のH社長と相談して、調査や都市計画的なこともヤロウやないかとなっ



て、移ることになったのです。

でも、残念なことにHさんは20年ほど前に亡くなり、二人のもくろみは崩れ去ってしまいました。しかし、ELDでは造園系の調査・計画の仕事に携わることができ、領域が広がった感じがします。そんな中、あの阪神・淡路大震災が発生しました。

その後、これまでひたすら走り続けてきたような感じですね。復興土地区画整理事業のコンサルタント2地区、URのお手伝いで市街地再開発1地区、建物共同化とマンション建替え各1棟などがハードなところでしょうか。これらと並行して勉強したのがワークショップ(WS)です。公園の計画づくりに住民参加を実現する有力な方法としてよく使われていますね。震災直前に、近畿地方で初めての公園WSを体験していました。伝説の「上沢2丁目公園WS」です。

さて、このWSですが、震災後のまちづくりのいろんなシーンで使われました。第1回世界鷹取祭での模擬WS、東垂水展望公園WSと参加して、ますます「これは使える」との意を強くしたのです。一方、ELDは造園系の事務所だが、私の仕事の関係もあり「まちづくり」も守備範囲に入っていることが知られるようになり、WSの仕事も来るようになりました。公園WSをするのに、造園系の事務所が強いのは当然ですが、当時WSや住民対応ができる人材が造園プロパーにいなかった。ただ、ELDにいたんですね。

こうして、まちづくりやWSの経験を積むことによって、仕事の巾が広がっていき、現在に至っています。

今の仕事をよく使われることばで表現すると「住民参加型まちづくりの支援」と言うことになるのでしょうか。

ELDでの仕事の他に、神戸復興塾や(特)神戸まちづくり研究所の仲間に入れていただき、活動のお手伝いもさせてもらっています。このほか、ボランティア的には「花みどり市民ネットワーク」の世話人、「みなとのもり公園(神戸震災復興記念公園)検討会」、「PMO あしや」、「KOBE地球おもてなし倶楽部」などの活動に携わっています。これらの活動内容の解説については、別の機会にまわしましょう。

また、「神戸まちづくりWS研究会」を神戸市のNさんと立ち上げ、WSの手法の研究や実践を通じて、WSのスキルアップと普及をめざしています。質の高いWSをお求めの方は、是非ともお声をかけてください。

神戸復興塾 勉強会報告

2008年7月勉強会

「医療崩壊」 上田耕蔵氏（神戸協同病院院長）

西 修（神戸まちづくりWS研究会）
<o-nishi@roy.hi-ho.ne.jp>

医学の進歩と医師たちの努力が生んだ「お産の安全神話」のために、逆に何か起こると「ミス」を疑われるという産婦人科医の悲哀や、医療費抑制のために厚労省が医師数を抑制してきたこと、総合医を大量養成して急性期病院の負担を減らそうと（大学医局から人事権を奪うために）厚労省が画策した臨床研修制度が、結果として医師の大学病院離れと地域偏在を生んでしまったこと、そして多くの医師が激務にさらされていること、などなど。現場でご苦労されている当事者ならではの話しにうなずくやら驚くやら。我々の知らないところで「医療体制の悪化」が徐々に、そして着実に進んできたことに溜息が出ました。



年明けにNHKスペシャルで、まさに「医療崩壊」が特集されましたが、そこでも、絶対的な医師不足や偏在、臨床研修制度の見直しが議論されていました。今、現役の医学生たちに最も人気があるのは整形外科だそうです。理由は「直接、命にかかわらなくて済むから...」。彼らの個人的な資質に問題を押し付けるのは間違いでしょう。何が彼らをそこまで委縮させているのか？丹波市で母親たちが始めた「本当に必要な人のためにコンビニ受診を控えよう」という運動が注目されています。地域で医療を守る運動が本当に必要なところに来ているのですね。いつにも増して考えさせられた勉強会でした。
（好評につき、8月にも「医療崩壊パート2」を開催）

2009年3月勉強会

「防災ゲーム『クロスロード』を体験しよう！」

西修氏（神戸まちづくりWS研究会）

萩原 正五郎（神戸復興塾）
<hagiwara.shogoro@obayashi.co.jp>

3月2日の勉強会は西修さんより、「クロスロード」の解説、進行と、参加者全員による体験が行われました。

この「クロスロード」とは、災害対応に関する知恵の体系化を目指した「阪神・淡路大震災に関する、神戸市職員へのインタビュー研究」の成果品の1つとして開発されたものです。クロスロード=進路を決すべき「岐路」「分かれ道」の名の如く、ゲーム参加者各々が、種々の質問に対して、「YES」か「NO」を、直観的に判断、一斉に回答し、その理由を自分の言葉で説明、お互いに内容を深めていくやり方で、ゲーム感覚のルールを加味しながら進めていくものです。今回のテーマは、阪神・淡路大震災を題材にした、オリジナル「神戸編」で、避難所食料配分、災害時出勤、仮設住宅建設、遺体安置所作業等、馴染みはあるが、非常に重たい課題を含んだ質問を例に、自然と議論と共通認識が深められ、「クロスロード」とはどのようなものなのか、貴重な体験をしながら、よく理解ができました。

「クロスロード」手法は、経験がないと場面が共有できにくい、背景を語る人がいないと深まらない等とよく言われますが、シンプルなので分かりやすい、生の事例を追体験できる、少数意見を大切に扱える、重たいテーマにも意見を出しやすい、年齢や立場に関係なく参加できる等、非常にいい強みがあります。また、「ゲーム」しつらえにより、意見の引き出しを深め、話しやすい場づくりができ、マニュアル化しにくい、或いは、できない問題や、組織ごとの固有の問題等に対して、うまく馴染むものであり、いろいろな場面での活用展開が考えられそうです。

今回の勉強会は、西さんの明解で、ユーモアあるリードにより、参加者全員の活発な意見が飛び交い、久しぶりに、盛り上がりのある会になりました。

この間に、以下の勉強会も開催しました。

9月26日 「四川地震の実態と復興」：垂水英司 「都江堰」大津俊雄
「都市部・農村部の実態」：室崎益輝 「被災と復興のまとめ」：上田耕蔵・黒田裕子
11月18日 市議激論！ 知の井坂 VS 情の浦上
「まちがいがなく、あなたも日本も楽しくなる新方式！」：浦上忠文・井坂信彦

『まち研での3年間』

田中 聡（元神戸まちづくり研究所事務局） < tanaka_so@y4.dion.ne.jp >

田中さんには2009年3月までの3年間、神戸まちづくり研究所事務局として働いていただきました。次のステップに向けて退職されますが、これまでの3年間を振り返っていただきました。



Iウォークゴールで豚汁を配る田中さん

まち研では主に交通まちづくり事業として三ノ宮駅周辺における公共交通乗継円滑化推進会議と団地再生事業として明舞団地エリアマネジメント事業に関わらせていただきました。

三ノ宮円滑化会議では、50を超える事業者、行政、市民、NPOのラウンドテーブルを設け、三ノ宮駅周辺に約30カ所所在するバス停の案内マップの作成、バス時刻を随時更新できるポータルサイト（乗り場インフォ三宮）の立ち上げに参加しました。会議を進める上で、各バス、鉄道、タクシー事業者、行政の意見を集約することは難しい部分もありました。しかし、バス停案内マップやポータルサイトができたことで、例えば三ノ宮-徳島間のバスが30分に1本出ていることが目に見える形となり、それが利便性向上につながるなど、会議メンバーで共有し、情報発信の重要性、また、それに伴う公共性向上による事業者の責任意識の向上につながり、協力体制が構築されていきました。

明舞団地では国交省のエリマネジメント推進事業を受託し、住民、行政、NPOなどが明舞団地再生に向けて情報、意見交換する場として「ラウンドテーブル（明舞まちづくり委員会 準備会）の設置」、住民主体で住民サービスを行う施設の管理運営を目指す「朝霧ショップ活用方法検討ワークショップの開催」、明舞センターの空き店舗を活用して大学のゼミを誘致する「明舞まちなカラボの

設置」に取り組みました。

ラウンドテーブルの設置では来年度から本格的に恒常的な情報交換・意見交換の場であるラウンドテーブルとして「まちづくり委員会」を機能させたいという兵庫県の意向を受けて、今年度離陸のプロセスをフォーラム形式で実施しました。住民と行政をどのような形で建設的に運営コーディネートするのかが今後の課題として挙げられます。

朝霧ショップ活用方法検討ワークショップでは、事前に住民ニーズ調査アンケートを実施し、それをもとに全4回のワークショップを実施しました。最小限の投資で最大の効果を得る検討も含め、ビジネスモデルを作っていくための施設リニューアル経費をどうするかが来年度以降検討されます。

明舞まちなカラボでは兵庫県立大学経済学部が名乗りを挙げていただきました。空き店舗の改修コンペも学生が参加しみんなで意見を出し合いました。今後の課題としては地域のニーズや団地再生にマッチした地域と共有可能な研究テーマを見つけていくこと、周辺他大学に参加を促して、大学間連携の場を実現することが挙げられます。

まち研事務局をはじめ、理事の皆様や多くの方々に支えていただき、何とか駆け抜けた3年間でした。ありがとうございました。まち研を離れますが、今後は即興演劇や身体表現などを通して広い意味での交流事業を行っていきたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

以下は、田中さんがされているプレイバックシアター関連のホームページのアドレスです。

< <http://ptproduce.com/> >

活動報告1『ワークショップは続くよ！どこまでも！』

野崎 隆一（神戸まちづくり研究所理事・事務局長）<ryuichi6384@gmail.com>

毎年のこととはいえ、年度の後半に入ると、多くの事業がバタバタと追い込みに入ります。

「芝生化駐車場事業」明舞団地エリアマネジメント調査、新たに加わった「丹波篠山これからの100年まちづくり事業」など、2月の土日のほとんどがワークショップで埋まってしまいう状況でした。辻名人は出ずっぱり、ワークショップ研究会メンバーの助っ人も多くが参加してくれました。

市民参画が常態化する中で参画ツールとしてのワークショップが多用されるのは歓迎すべきことではありますが、ワークショップさえしておけばということにならないよう気を引き締めなければと考えさせられるこの頃です。

こうべ 🇯🇵 (あい) ウォーク

2001年を最後に中断して以来、久しぶりに実施しました。1月11日には、かつての懐かしい顔に沢山出会うことができました。また、柏崎からも25名の方々が参加してくれ、前日の交流会も含め貴重な意見交換と復興の課題について多くを共有できたように思います。

年に一度、塾・まち研総掛かりで取り組むものがあるのも良いかもしれないと思いましたが、皆さんはいかがですか。

明舞団地再生

明舞団地再生については、今年度も予算不足の中、あちこち助成申請をして継続しています。

§ 明舞まちづくり広場 _____

明舞まちづくり広場運営については、ハウジングアンドコミュニティ財団と神戸県民局(県公社)の助成を受けて、東末さんと川上さんが週2~3日常駐する形で住民同士の助け合いの仕組みづくりを応援しています。

昨年生まれた「明舞お助け隊」「ふれあいカフェ陽だまり」「子育てママのほっとスペース」などの

活動も少しずつ拡充し、新しい人材の登場も見られるようになりました。



§ エリアマネジメント事業 _____

国交省のエリアマネジメント事業では、3つの事業を行いました。

・明舞まちづくり委員会(準備会)

一つは住民・事業者(公社、機構)・行政(兵庫県、神戸市、明石市)によるラウンドテーブル「明舞まちづくり委員会」の設立準備会をフォーラム形式で12月6日と1月30日、3月5日の3回実施しました。小森塾長の基調講演、各団体の自己紹介、団地再生への意見交換などを行い、来年度も情報や意見交換の場として継続して行くことを確認しています。2月11日には大阪の先行事例(彩都、千里)の見学会を行い、ニュータウン開発にセットした取り組みと、明舞と同じオールドニュータウンでの手作りの活動を見学し関わっている住民との意見交換ができました。

・朝霧ショップ活用計画検討ワークショップ

もう一つは、遊休施設の利用実験として「朝霧ショップ活用検討」を行っています。昨年11月に周辺地域へのアンケートを行い、12月13日に意向集約のワークショップを行いました。大がかりな取り組みではなく、地域でできることからやってみようと来年度に向けた実行委員会ができました。

・明舞まちなカラボ



最後は、明舞センターの空き店舗を使った「まちなカラボ」です。近隣の大学生が地域住民と交流しながら地域研究をおこなえる拠点をつくらうというものです。兵庫県立大学経済学部が手を挙げてくれたので1月30日にはオープン式典を行いました。とりあえずは、先生方に公開講座を開いたり、ゼミをしていたりということから始めようとしています。本格的な運用は4月からになります。

市民活動支援

神戸市から受託している「NPO 等育成アドバイザー派遣事業」と「小規模作業所等事業サポーター制度」は、今年も他の中間支援 NPO と連携する形で行っています。相手先の NPO や神戸市

の評価は高いのですが、来年度に向けた課題整理をしています。年度を超える毎に、仕組みを進化させていく、これも NPO の使命だと考えています。

新たな取り組み

小森元理事長が移り住んだ篠山市より来年度計画している社会実験のためのワークショップの依頼があり2回行いました。「景観」「交通」「地域間連携」の3つのテーマで社会実験のための意見集約を行っています。21年度の社会実験にそれらの意見をどのように反映させていくのかが今後の課題です。数年前に HMP（兵庫まちづくりプラットフォーム）事業の一環として「多自然居住ワークショップ」を行いました。その縁が繋がってきたように思います。



2008 年度事業一覧

民間非営利組織、市民活動及びまちづくりに係る調査・研究・研修・政策提言

研修受け入れ事業（人と防災未来センター・大竹市・明石市・広島大学・JICA・大阪国際大学）/ 阪神淡路大震災における被災者の長期生活再建調査業務 / 「地域の CSR セミナー」開催及び「CANPAN 第2回 CSR プラス大賞」への企業推薦に関する業務 / グラスパーキング推進事業

民間非営利組織、市民活動及びまちづくりの支援事業

コレクティブオフィス事業（5 団体）/ 相談事業 / NPO 育成支援アドバイザー派遣事業 / 小規模作業所等事業サポーター制度 / 委員会及びワークショップ運営等委託業務（篠山市）

まちづくり及び地域再生のために必要な事業

修学旅行受入事業（佐渡市立羽茂中学校・新潟市立二葉中学校・岡山市立竜操中学校・名古屋市立日比野中学校・岐阜市立加納中学校・東京都私立和光高等学校・四日市市立常磐西小学校）/ 明舞活性化事業（まちづくりコーディネーター常駐業務・明舞団地の再生を支えるサービスの総合化を促進する地域内中間支援組織の設置・充実活動・明舞地区エリアマネジメント推進方策検討業務・朝霧ショップ活用検討ワークショップ関連業務）/ 三ノ宮駅周辺における公共交通乗継円滑化推進会議にかかる業務

その他

講師紹介 / 広報誌発行 / コピー・印刷機セルフサービス 等々

活動報告2 『CSR事業「CANPAN 第2回 CSR プラス大賞」報告』

CSR プロジェクト in 神戸・兵庫 2008 実行委員会 委員長 山地久美子

神戸まちづくり研究所は新たな活動として、CSR (Corporate Social Responsibility : 企業の社会的責任、あるいは、Community Social Responsibility : 地域の社会的責任) の推進に取り組んでいる。2008 年度には最初の CSR 事業として、日本財団が Web 上のコミュニティサイト CANPAN で展開している「CANPAN CSR プラス」に参画した。今回の事業の柱は前号(15号)で紹介した「地域の CSR セミナー」(*)を開催し地域の人たち、企業・団体と一緒に CSR について議論する場をつくること、そして CSR に取り組む地元企業を「CANPAN CSR プラス大賞」(**)へ推薦することであった。

2008 年度の「CSR プラス大賞」は神戸まちづくり研究所から「神戸風月堂」(代表取締役会長：下村俊子氏)を地元企業として推薦させていただいた。推薦の理由はいくつもあるが、老舗の和洋菓子会社として「お菓子は文化のエッセンス」を信条に神戸元町の風月堂ホールで行っている文化事業や ロドニー賞 の創設など、ユニークな地域文化振興・社会貢献に長年にわたって取り組んでいること、

さらに震災復興の経験から地域活性化へ向けた積極的な活動を行っていることなどが挙げられる。神戸風月堂の取組

みの詳細は当方で作成した企業レポートを参照されたい。

(コミュニティサイト CANPAN CSR URL:
http://blog.canpan.info/csraward_2008/archive/38)

今回の事業を推進する中、企業・団体への訪問や情報収集を通じて様々な CSR の取組みを知ることができた。多くの企業や団体が CSR の重要性を認識していて、その活動分野は環境保全への取組み、社員や地元の市民との社会活動・文化活動、労働環境の改善...など多様である。一方で、日本社会の風土として「陰徳が美德」の意識が強く、CSR 活動を表に出さないこともあるようだ。企業や団体は自社の CSR の取組みを積極的に発信して欲しいと思う。

CSR 活動は企業にとって企業活動と相反しない win-win (収益と社会貢献の両立は可能) なものであり、企業と社員そして市民が共に推進していけばそれは社会全体にとって win-win となる。神戸まちづくり研究所は NPO として今後どのような活動、仕組みづくりを推進していくことが重要か、地元の企業・団体、経済団体そして市民とともに改めて考えていきたい。



* 「地域の CSR セミナー in 神戸・兵庫」を 2008 年 7 月 29 日(火)に開催
主催：神戸まちづくり研究所 共催：神戸経済同友会
後援：神戸商工会議所・兵庫工業会・兵庫県経営者協会

** 「CSR 大賞」へは全国規模、あるいは各地で CSR に取り組む企業 20 社がノミネートされる。ノミネート企業は Web 上の CSR 情報データベースと取組み紹介レポートが公開され、それらの情報をもとに市民の Web 投票によって決定される。日本財団が主催し、ダイバーシティ研究所が共催、全国各地の NPO が協力して開催される。ノミネート企業 20 社のうち 10 社は「情報開示力枠」として、CSR 情報データベースに自主入力しているエントリー企業(東証 1 部上場企業など)の中から情報開示力の高い企業がノミネートされる。「地域推薦枠」の 10 社は各地域(の NPO 団体)から推薦を受けた企業がノミネートされる。2008 年度の投票は 2 万票を超え、神戸風月堂は全国から 1212 票もの応援(票)をいただいた。

《12p から続く》しかし、10年経って、最も重要なことは、何を伝えるかではなく、「どのように」伝えるかが問題であることに、思い至ったのである。記録ではなく記憶を、教訓ではなく文化として、広く世界の隅々まで、長く時代を超えて伝承し、災害からの活きた教訓を語り継いでいくことこそが防災・減災に大切だ、ということである。その最も凝縮した活動が、人と防災未来センター（DRI）で事務局をつとめる TeLL-Net（Transfer Live Lessons Network：http://tellnet.jp/）である。

TeLL-Net は、国や地域を越えて大災害を語り継ぎ、これからの自然災害に備え、被災者を少しでも減らすことへの貢献を目的とする国際ネットワークである。2005年1月18日、日本の多くの自然災害被災地から、世界各地の災害に遭遇した国から、阪神・淡路大震災10周年を祈念して神戸に参集し、「国際防災・人道支援フォーラム2005」を開催し、「被災者の視点から『大災害を語り継ぐ』ことは、これからの災害で被災者を少しでも減らすことにつながっていく」と提言した。そして、その後、各国との連絡を続け、2006年1月20日に再び神戸に集まって設立総会を開き「世界災害語り継ぎネットワーク TeLL-Net」を発足させ、発足記念フォーラムでは、10カ国11団体・個人が参加し、インドネシアやイラン、新潟や神戸など、地震や津波で大きな被害を受けた経験をもつ地域で、防災や災害語り継ぎ活動に関わる防災担当者から、それぞれの取り組みが紹介された。そのひとりが、先に紹介したシムル島のダーミリ市長であった。

2005年8月末ニューオーリンズを襲った超大型ハリケーン・カトリーナ災害と神戸の被災地交流もまた、語り継ぎ活動を軸に積み重ねられている。2006年10月トーマス・ニューオーリンズ市議会議長はじめ8名が国際交流基金CGPのプログラムで神戸を訪問し、震災復興における市民まちづくり活動に大きな示唆を受けた。2007年9月にはルイジアナ州立博物館でのシンポジウム「阪神大震災とハリケーン・カトリーナ」に招待され、神戸から「震災語り継ぎひまわり団」を結成し、語り部による「語り継ぎしていかなければならない震災の体験・復興への取り組み」の話をした。さらに、2008年10月には、復興の交流だけにとどまらず、共通の伝統的文化である「神戸とニューオーリンズのジャズ交流」が鷹取・六甲道地区などで行われた。

阪神・淡路大震災で生まれた TeLL-Net（世界災害語り継ぎネットワーク）は、神戸を核に、世界各地の自然災害被災地をつないで、「災害語り継ぎ活動」を今後も展開していく。



市議会議員一行（松本せせらぎ 06年）



震災語り継ぎひまわり団（07年）



ジャズ交流（たかとり教会中庭 08年）

（この原稿は、2009年1月に日本都市計画学会ニュースレター「日本の災害と復興まちづくり」に寄稿したものであるが、英訳しての掲載であるため、ここに日本語版を再掲した。）

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所・神戸復興塾

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号 TEL：078-230-8511 FAX：078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = http://www.kobe-machiken.org/

まち研ニュース 16号

阪神・淡路大震災から災害を語り継ぐ「TeLL-Net」

小林 郁雄（神戸まちづくり研究所理事長） < ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp >

インドネシア・アチェの西にシムル島という面積 200ha の小さな島がある。20 万人近くが亡くなるという大被害をもたらした 2004 年 12 月 26 日インド洋大津波の時に、人口 8 万 4000 人のこの小さな島では、死者はなかったという。80%の住民は海岸での漁業で生活しているというこの島で、それはなぜだったのか？

シムル島ダーミリ市長(Drs. Darmili, Municipal Mayor of Simeulue, Aceh, Indonesia)の報告(2006 年 1 月 20 日 TeLL-Net 発足記念フォーラム)「地域の英知が命を救う Local Wisdom that saves lives」で、次のように話していた。 <http://tellnet.jp/jp/highlights/index.html>

[大津波では全ての家が被害を受けた。7000 が全壊、6500 が損傷した。全ての病院等施設が損害を受けた。学校の 75%、300 の宗教的施設が被害を受けた。2 万人の生徒が仮設のテントで学校生活を送ることとなった。3 万 3000 人がいまだに元の生活に戻っていない。]、にもかかわらずである。



シムル島の位置



シムル島のインド洋大津波



ダーミリ市長夫人が SMOOONG を歌う

[2004 年 12 月 26 日の出来事、地震を感じた。引き波が起こる、魚が砂の上で跳ねる。誰かが叫んだ「SMOONG！津波だ！」。次々と逃げながら皆が「津波だ！」と叫び、丘へ向かった。皆の避難を促したスモン（津波）に関する地域の知恵。1907 年の津波でシムル島に大きな被害があり、年長者は次世代に話と歌で教訓を引き継ぎ、津波の特徴を説明した。何をすべきか、何をしてはいけないかを伝えている。]

阪神・淡路大震災（1995 年、死者 6434 人）は、日本では第 2 次世界大戦後伊勢湾台風災害（1959 年、死者 5091 人）以降 35 年ぶりの死者 1000 人を超える大規模自然災害であった。その後の 14 年間にも多くの震災・水害などはあったが、その被災状況は比べるまでもない飛び抜けた巨大災害であった。そのため、これまでその物理的な地震動や被害の状況、社会的あるいは精神的な被災や影響、それからの復旧・復興といった多方面にわたる詳細な記録や多くの教訓など、行政や学会、マスコミや NPO・市民などから数え切れないほど発表されており、それらについて、被災地の多くの資料室やインターネットなどで容易に知ることができる。

そうした記録・提言・教訓によって、直後の緊急対応・応急処置、災後の復旧・復興について多くの学んできたことを各地に伝えるべく、さまざまな活動が被災地を中心に発信されてきた。【11p へ続く】